

荒木牧人作「モスキーの冒険」

< 前編 >

- ナレーション 静かな霧雨の降る露の日の朝、彼はある小さな水たまりから誕生しました。彼の名はモスキー。元気な蚊の子供です。生まれたばかりのモスキーには、自分が何をすればいいのか分かりませんでした。回りをぐるりと見渡せば、何か大きな岩に囲まれているのです。その時、近くを働きアリが小枝をくわえて通りかかりました。
- モスキー す、すみません。あの - 、ここは一体どこなんですか？
- 働きアリ ここかい？ ここはな、人間の家の庭さ。
- モスキー 人間の、家の、庭...？ 人間というのは何ですか？
- 働きアリ あーら、お前さん。人間を知らないんかね。人間というのほねえ...。
- ナレーション ありはモスキーに、人間というものがどんなに大きいか、どんなに頭がよいか、そしてどんなに恐ろしいかを教えました。
- モスキー アリさん。僕は一体何をして生きていけばいいのですか？
- 働きアリ 何をしてって...。お前さんは生まれた時に神様の声を聞かなかったのかい？
- モスキー ええ、何も。
- 働きアリ そうかね。ふうむ。それなら仲間を見つけるといいよ。そして仲間のしていることをまねすればいいんじゃないのかね。
- モスキー そうか。仲間を見つければいいのか。分かりました。じゃあ早速探してみます。
- ナレーション モスキーはありにお礼を言うと、自分の背中に付いていた羽を動かしてみました。
- モスキー あれ？ 体が軽くなった。わぁ！
- ナレーション モスキーの体はフワリと空中に浮き上がりました。同じこと、遠く離れた湖のそばで、もう1匹の蚊が誕生しました。
- 神様の声(エコー) スティング、スティング。
- スティング あれ、声はするけどだれもいない。あなたはどなたですか？
- 神様(エコー) わたしは、お前をつくった神だ。いいかい、お前の名は“スティング”だ。お前はたくさんの子供を産み、立派な母親にならなくてははいけない。
- スティング はい、神様。お言葉をありがとうございます。一生懸命生きていきます。
- 神様(エコー) よし、それではまず飛び方を覚えるんだ。
- ナレーション こうしてスティングは、空を飛ぶ練習を始めました。
- スティング ええと、“力いっぱい地面をけり、空中に飛び上がると同時に、羽を開いてゆっくと動かす。”

ナレーション 神様から授かったアドバイスはこれだけです。
ステイング 頑張るわ、わたし。強い、立派な母親になりたいもの。これぐらいのこと、できなく
どうするの。

ナレーション 飛び上がっては直角に地面に落ち、また飛び上がってはフラフラになって落ち、
どうしても飛ぶことができません。ステイングの体はすっかり疲れ果ててしまいました。
太陽は赤く空を燃やしながら西の地平線に近づき、東からは、暗い夜のとばりが忍び寄ってきました。

ステイング 今日ほそろそろ終わりにしましょう。まだ飛べないけど、きっと明日は飛べるよう
になるわ。

ナレーション ステイングは目を閉じると、神様に教わったお祈りを唱えました。
ステイング 神様。本当はわたし、今日空を飛べなかったことが悔しいです。でも、あなた様を
信じています。明日はきっと飛べますように。アーメン。

ナレーション 静かな静かな夜でした。ステイングは目を閉じ、草と草とが奏でる波のリズムに
耳を傾けているうちに、スーっと眠りに落ちていきました。
そのころモスキーは、自由自在に空を飛べる自分に有頂天になっていました。でも彼は、それが神様が目的をもって特別に授けてくれた力だとは夢にも思いませんでした。

モスキー (モノローグ) 何で僕は飛べるんだろうか。でも、こんなに飛び続けているのに、
何で仲間と会えないんだろうか。

モスキー おおーい。僕の、僕の仲間はどこにいるんだぁー。何で出てきてくれないんだよ
ー。

神様{エコー} モスキー。モスキー。
モスキー え...? だ、だれ?
神様{エコー} お前には、しなくてはいけない使命がある。よおく聞きなさい。
モスキー な、何だろう。僕の頭ん中、おかしくなったのかな。
神様{エコー} お前はここから東に飛び続けなさい。夜が明けるころには、小さな湖に着くだろ
う。そこで待っているがよい。

モスキー あなたは...、一体...、だれなんですか?
ナレーション でも、もう声はしませんでした。辺りに夜の静けさが戻り、モスキーはまたたった
一人になりました。モスキーは訳も分からず空中で止まっていた。

モスキー もしかして、これがアリさんの言っていた“神の声”かもしれない。そうか、やっと
僕も神様の声を聞くことができたんだ。よおし、東を目指すぞ!

ナレーション モスキーは、自分の出せる限りの最高スピードで、一生懸命、東に向かって飛び
出しました。
果てしなく長い時間が過ぎ、ようやくモスキーの目指す空の向こうがほのかに紫

色を帯びてきました。

モスキー ハァハァハァ、や、やっと夜明けが近づいたぞ。もうすぐだ。もうそろそろ{ハァハァ}湖が見えるはずだ。(ふー)もしあの時の声が神様の声だったら、きっと僕のしなきゃいけないことが分かるはずだ。頑張るぞぉ！

ナレーション モスキーは必死でした。疲れきった羽を懸命に動かして、もうかなりフラフラした飛び方でしたが、決して休まずに飛び続けていました。その時モスキーの心を支えていたのは、神様への期待だけでした。

モスキー ああああぁー！ あったぞー、湖だ！

ナレーション ついに、朝焼けの東の果てに、緑の木々に囲まれた湖が見えました。ラストスパートとも言うべき力を振り絞って、彼はゆっくりゆっくりとその湖に近づいていきました。

(音楽) {ブリッジ}

スティング ふわああ。よく眠ったわ。うーんいいお天気。あ、そうだ。飛ぶ練習しなきゃ。今日はもう飛べるようにならなきゃね。

ナレーション スティングは、昨日と同じように練習に励みました。太陽は次第に高くなり、近くに広がっている湖をキラキラと照らしました。

スティング よいしょ。えい！ もう一度、えい！ あ、浮いた、浮いたわ！

ナレーション ついにスティングは、飛ぶことを覚えたのです。

スティング 神様。ありがとうございます。わたしはやっと飛べるようになりました。これもすべてあなたのお陰です。これで立派な母親になれますね。

神様{エコー} いや、お前はこれからほかの動物の血を吸って、子供を産むための栄養を体に蓄えなくてはいけない。お前の口に付いているその針{スティング}を使って、血を吸うのだ。

スティング 血を吸わなくてはいけないのですか、神様？

神様{エコー} そうだ。でも安心しなさい。わたしはいつもお前を見守っている。

スティング ありがとうございます、神様。子供のために頑張ります。

ナレーション スティングはそう言うと、まだ慣れない飛び方で、空中に飛び出しました。

スティング さあて、どの動物の血を吸えばいいのかしら。

ナレーション スティングは、湖に水を飲みに来ていたロバやラクダの血を吸いました。ロバやラクダはしっぽを使ってスティングをたたき落とそうとしました。でも、その動きはあまりにもゆったりしていたため、彼女は容易によけることができました。そこへ、何やらほかの動物とは違う2本足の生き物がやってきました。

人間 ようし、水はたっぷり飲んだと。じゃ、そろそろ行くか。

ナレーション それは人間でした。

スティング (モノローグ)ふいふい、あの動物からもちを吸わせていただくわ。

ナレーション かわいそうはスティングは、人間の恐ろしさを知りませんでした。なんせ、人間

を見たのも初めてだったのですから。

スティング
ナレーション それ、プス！ スースースー。

人間 人間は、自分の胸にスティングの姿を見つけると、にやりと笑ってもう片方の腕をそっと振り上げました。スティングは、ただひたすら血を吸うことに夢中で気づきません。

人間 こいつ、おれの血を吸ってやがる。この人間様の血をな。そんなやつは、死刑だ！

スティング
(効果音) えー！ 死刑？
「パチ！」{体をたたく音}

スティング
ナレーション キャー - ！
スティングは突然、強い衝撃を受け、まさかさまに地面に向かって、まるで飛ばない紙飛行機のように、クルクルと落ちていきました。

人間 へっへっへっ、やったぜ。蚊ごときにおれ様の血を吸われてたまるかってんだ。でもちょっと遅かったか。あー、かわいい。

ナレーション
スティング
ナレーション スティングはそのまま地面にたたきつけられてしまいました。
い、い、痛い...。か、神様、助けて...。
スティングの2本の腕は、人間の攻撃によって、どこかへ飛ばされてしまいました。残った4本の手足も、ひどい激痛を感じ、動かすことは不可能でした。気がだんだんと遠くなり、スティングは静かに目を閉じました。

(効果音) {雨の音}

ナレーション いつの間にか、激しい雨が降り始めました。その雨が、スティングの体を打ち付けました。まだかすかに息をしていたスティングの傷口に、雨は容赦なく染み込みました。悲鳴を上げたくても、もはや声も出ません。

スティング {モノローグ} ああ神様。わたしの命もこれまでです。わたしはあなたのおっしゃったことを達成できませんでした。本当にすみません。お許しください。

ナレーション その時でした。だれかがスティングの倒れているその場所に向かって走り寄ってきたのです。

スティング {モノローグ} わたしは殺されるの？

ナレーション 足音はスティングのすぐ後ろまで来て止まりました。

< 後編 >

ナレーション 小さな蚊の子供のモスキーは、ほかの生き物が生まれた時に頂くという“神様の声”を頂いていませんでした。何をしたらよいのか分からないモスキーに、ある日、天の神様はそっとお語りになったのです。

神様{エコー} 東の湖に行きなさい。

ナレーション 声を聞いたモスキーは、やっと自分にも“神様の声”が与えられたことを知り、

急いでそこに向かいました。同じころ、その東の湖で生まれた蚊の子供、スティングは、“神様の声”を頂いていました。そして神様に言われたとおり、丈夫な母親になるための栄養であるほかの生き物の血を吸おうと、人間を刺した時、逆に襲われ、今や死線をさまよう重傷を負ってしまったのです。

スティング {モノログ}だれも助けに来てくれないで、わたしはこのまま死んでしまうんだわ。

ナレーション スティングはそう思っていました。その時です。

モスキー 大丈夫ですか？

ナレーション 傷ついたスティングの前に、やっとの思いで目的の湖にたどり着いたモスキーが現れたのです。

モスキー ああ、何てひどい…。あ、何もしゃべらなくていいですよ。とにかく、何とかしなきゃ。ここだと場所が悪いなあ。あそこの木の下まで移動しよう。

ナレーション そう言って、モスキーはできるだけ優しくスティングの体を抱えると、ゆっくりと木の下に向かって歩き始めました。

スティング あ、あり…が…と…。

モスキー 話しちゃダメだ！ 君はすごい重態なんだ。待ってて、もう少しかから。

ナレーション モスキーは湖に来るまでの疲労など忘れてしまっていました。今はただ、やっと見つけた自分の仲間を助けることで頭がいっぱいだったのです。

モスキー (ふうー)よし、着いた。じゃあ、ここで横になって少し待っていてください。羽をたためますか？ たたんどいたほうがいいですよ。じゃ、すぐに戻ってきます。

ナレーション そう言って、モスキーはヒュッと飛んでいってしまいました。

スティング {モノログ}ああ、何て飛ぶのが上手なんだろう。

ナレーション スティングは、風のように飛んでいったモスキーを見て、そう思いました。モスキーは飛び立ったものの、一体どうやって彼女を助ければよいのかと悩んでいました。

モスキー 確か、アリさんに教わってたよなあ。うーん、忘れたな。

神様{エコー} モスキー、モスキー。

モスキー え？ あ、か、神様ですか？

神様{エコー} モスキー。お前の使命は、スティングを助けることだ。

モスキー スティン…グって、さっきの僕の仲間のことですか？

神様{エコー} そうだ。さあ、よく聞きなさい。明日、太陽が沈むころ、スティングが待っているあの湖に、わたしの愛する一人子が通りかかる。“イエス”と呼ばれるその一人子は、お前がどのようにその使命を果たすか、教えるであろう。さあ、湖へ戻っていきなさい。

モスキー は、はい。分かりました。神様、ありがとうございます。

ナレーション モスキーの心は躍りました。スティングを助けられるかもしれないといううれしさ

と、神様に再びお会いできたといううれしさが一緒になって、彼の心を揺さぶったのです。木の下に戻ってみると、スティングはまだ激痛に苦しんでいました。

モスキー スティング、頑張れ！ 明日まで、明日まで待てば“イエス”という神の一人子が、君を助ける方法を教えてくれるんだよ！

スティング ええ... あ、痛い！

ナレーション スティングは、必死に痛みをこらえました。飛ばされた2本の腕のところが燃えるように熱いのです。そんな彼女を前に、モスキーは、とても明日まで何もしないでいることはできませんでした。

モスキー {モノログ}どうすればいいんだろう。どうすれば...

ナレーション その時、モスキーはあの冷たい湖の水を思い出しました。

モスキー そうだ、僕が湖の水を吸って、それをスティングの傷口にかけて冷やしてあげればいいんだ。

ナレーション そう気づくと、早速モスキーは水際まで飛んで行って、冷たい水を口に含むと、またスティングのところに引き返し、そっと傷口に注ぎました。

スティング あ、冷たい...

モスキー どう？

スティング ええ、何だか痛みが薄らぐみたい。

ナレーション その夜、モスキーは何度となく水際と彼女の間を往復しては、冷たい水でスティングの傷口を冷やし続けました。こうして、長い夜が明けるとき、モスキーの体はもう綿のように疲れ切っていました。痛みがほんの少し弱まったスティングは、モスキーに話し掛けました。

スティング あ、あなた...、お名前は？

モスキー 僕かい？ 僕はモスキーって言うんだ。ずっと西のほうから神様の声を聞いて来たんだよ。

スティング 神様は何て...？

モスキー 「ここから東に向かって、ずっと進んでいきなさい。一晩中飛んでいくと湖がある。そこでお前のすべきことが分かる」って。だから、そのとおりに飛んできたんだ、ここまで。

スティング 一晩中も飛び続けていたの？

モスキー うん、そう。でも、疲れていたはずだったんだけど、君に会って助けようと必死になってたから、それも忘れちゃってたみたいだ。

スティング そんなに疲れていたのに、わたしのために一晩中...。本当にごめんなさい。

モスキー 謝ることはないさ。僕は神様に言われたことをやってるだけだよ、スティング。

スティング 何でわたしの名前を知ってるの？

モスキー 神様が教えてくれたんだよ。僕に「スティングを助けなさい」ともおっしゃったん

だ。

スティング そうだったの？ わたし、神様に「助けて」って祈ったのよ。神様はあなたを通して助けてくださったんだわ。

モスキー イエス様が来られる夕方まで、まだ時間がある。でもこのままだと、スティング、君は体が弱って死んでしまう。人間にたたき落とされた時、せっかく吸った血もほとんど吐き出しちゃったんだろ？

スティング ええ。

モスキー そうか。僕は雄だから血は吸えないし。...よし、それじゃ、甘い果物の汁を取ってくる。湖へ来る途中、よく熟れたビワの木があったんだ。待ってて。

ナレーション そう言うと、モスキーは疲れた体をむち打って、甘い果汁を吸いに飛び立ちました。

スティング わあ、甘い。モスキー、ありがとう。さあ、疲れたでしょう。あなたも少し眠ってちょうだい。わたしはもう大丈夫だから。

モスキー そう？ じゃ少し休むからね。何かあったらすぐ起こすんだよ。

ナレーション モスキーは羽をきちんとたたむと、まるで死んだように深い眠りに落ちていきました。スティングはモスキーに、実は自分の羽がもう動かなくなってしまったことを告げませんでした。モスキーにはこれ以上の心配をかけたくなかったからです。やがて太陽は地平線に向かって傾き始めました。

スティング {モノログ}そろそろ“イエス”と呼ばれるお方が来るころだわ。モスキーったら、気持ちよさそうに眠っている。どうしよう。でも、やっぱりモスキーにだけでも会いに行ってもらわなきゃ。

ナレーション そう言ってもモスキーを起こそうとしたスティングの肩に激痛が走りました。

スティング あ、痛い！

モスキー どうしたんだい？ あ、もうこんな時間か。

スティング モスキー、わたし、行けないわ。

モスキー え？ どうして？ まだどこかが痛いのかい？

スティング ...羽が、羽が動かないの。

モスキー 何だって？ じゃ、どうすればいいんだ？

スティング もういいのよ、モスキー。あなたは初めて会ったわたしを助けるために、こんなに尽くしてくれた。わたし、それだけでもう十分よ。

モスキー 僕、行ってくる。

スティング どこに？

モスキー “イエス”という方に頼んで、ここまで来てもらうしか方法はないと思うんだ。待っててよ。

ナレーション その時でした。

イエス その必要はないんだ。

ナレーション 二人の前に、大きな人間が現れたのです。

スティング に、に、人間だわ。殺されてしまう。モスキー、に、逃げるのよ！

モスキー え？

スティング 早く！ あ、痛！

モスキー スティング！

スティング あ、は、羽、わたしの羽が！

ナレーション 最後の力を振り絞って飛び立ったスティングの右側の羽が、ぱさっと地面に落ちたのです。

スティング ああ、ああああ(泣く)

モスキー ああ、何てことに。…神様、僕は…もうスティングを助けることができません。でも神様、どうか、どうか彼女をお助けください！

イエス 恐れることはありません。

モスキー その声は…神様ですか？

ナレーション モスキーは顔を上げました。目の前には大きな人がかがみ込んでいました。

モスキー 神様。この人間から僕たちを守ってください！

ナレーション その人は、静かにモスキーを見ました。モスキーもその人を見ました。じっと見詰め合ったままで、その人がそっと口を開きました。

イエス わたしですよ、モスキー。

モスキー え？ …ええ？ か、神様ですか？

イエス わたしが神の子、イエスです。

モスキー あなたが、イエス…様？

イエス さあ、取れた羽を持ってきなさい。そして、スティングをうつぶせに寝かせるのです。

ナレーション イエスは静かに言いました。モスキーが言われたとおりにすると、イエスはその羽をスティングの羽の付け根に付けて、「ふう」と優しく息を吹きかけました。

スティング あ、羽が、羽が動く！ わぁ、直ったわ。直ったのよ、モスキー！

モスキー ああ、ほんとだ。ちゃんと動いてる！ あれ、あれれ？

スティング どうしたの？

モスキー スティング、君の腕、腕が…。

スティング え？ あ、あ!!

ナレーション 飛ばされて、なくなっていたはずの2本の腕も、しっかりと付いているのです！

モスキー イエス様、本当に…。あ、あれ？

ナレーション イエスの姿は、もうそこにはありませんでした。スーっと二人の前から消えてしまったようでした。

モスキー 神様、スティングの命を助けてくださって、ありがとうございます。イエス様を送ってくださらなければ、スティングの命はありませんでした。そうしたら僕は、僕はも

う…。

神様(エコー) いや、モスキー。スティングを救ったのはお前だ。命がけで、彼女の命を救うために尽くしたお前の愛の力だよ。イエスはそれを見たからこそ、スティングを助けたのだ。さあ、これからは、二人の新しい未来をつくるのだよ。

モスキー 神様…。

スティング …ありがとう。

ナレーション 二人が見上げる空は、あかね色に燃えていました。

(完)